【ポスター発表】

ソーシャルワークはマイノリティ運動・労働運動から何を学べるか？

ーカナダ・ストラクチュラル・ソーシャルワーク教育実践例からー

○　富山福祉短期大学　　氏名　根津　敦（４３９２）

新自由主義的グローバリゼーション　社会運動　ソーシャルアクション

１．研 究 目 的

「現在のソーシャルワークは新自由主義的になっている」あるいは「新自由主義的政策の影響によりソーシャルワーク実践の土台が崩れている」という指摘があり、既存のソーシャルワークに対する反発・嫌悪・幻滅の一原因と見なされている。資本主義の暴走とも形容される社会変容の中で、ソーシャルワークはその流れを押しとどめ反抗する勢力に参加することなく、むしろ福祉後退の体制維持装置を演じてきているとは言えないか。慈善組織化協会やセツルメント運動を代表としたソーシャルワークの源流は社会的不正義である貧困への闘いであったが、ソーシャルワーカーは社会正義運動とも形容される反（新自由主義的）グローバリゼーションの戦線に参加しているだろうか。

国際ソーシャルワーカー連盟と国際ソーシャルワーク学校連盟が 2000 年に採択したソーシャルワークの定義は、「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利の増進を目指して社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人々のエンパワメントと解放を促していく。ソーシャルワークは人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人々がその環境と相互に影響し合う接点に介入する。人権と社会正義の原理はソーシャルワークの拠り所とする基盤である」である。個人・社会レベルで福祉の向上を図り、人権を根本に社会正義の実現を達成するためには、市民・他の専門職・社会活動家などとの連携・協働は必須であろう。連携・協働する場合でも、活動の基盤となる理論の支えが必要である。

現在展開する社会運動とソーシャルワークとの乖離を正視しながら、ソーシャルアクションを起業できるソーシャルワーカー養成への提言とともに議論を深めたいと考える。

２．研究の視点および方法

カナダではソーシャルワークを、多様化・流動化する社会における“抑圧”に挑戦する専門的活動と位置づけている。帝国主義・植民地主義・人種差別・階層差別・グローバリゼーション・企業至上主義を背景としたその“抑圧”は、個人・家族・グループ・コミュニティに影響を与え、貧困・搾取・支配などを生んでいる。人々と協働しながら、全ての人々の尊厳と可能性を最大化し、平等と社会正義を実現する専門的実践力の養成を目指すカナダのソーシャルワーク教育課程を分析する。カナダの各大学は、拠って立つソーシャルワークの理論を標榜しており、今回は発表者が学んだカールトン大学のストラクチュラル・ソーシャルワーク教育（大学院）が、どのように社会運動をソーシャルワーカー養成に活

用しているかを分析し考察する。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づき配慮しながら、公的に発表されている文献や資料等を参考・使用した。

４．研 究 結 果

ストラクチュラル・ソーシャルワークだけではなく、特にコミュニティワークの重要な思想的基盤として、パウロ・フレイレの考えが取り入れられており、パウロ・フレイレの思想を視座にしてソーシャルワーク実践や社会開発活動を分析し考察した論文を、講義テキストに採用している。当事者が自らの状況に”目覚める”、物質的精神的な二重の抑圧による抵抗の減退、被抑圧のカラクリの”意識化”、抑圧から解放する「教育 pedagogy」と対話について、具体的な社会運動・活動実践と関連付けて、講義での議論が進む。

マイノリティ運動として、例えば女性運動が取り上げられ、フェミニズム・ソーシャルワークの視点が教授される。しかし同時に、従来のフェミニズム運動が白人女性たちによって指導されてきたために、人種差別問題を直視せずに白人優位体制維持に貢献してしまった問題点も指摘され、個別のイシューへのこだわりの限界についても議論される。

カナダにおける労働運動の衰退や労働組合の閉鎖性への分析や国境を越えた労働運動や国内の不法移民労働者との連携という新しい労働運動の考察を通して、ソーシャルワーカーが対象とすべき人々や直面する問題への理解をより深める。

1999 年の WTO（世界貿易機構）シアトル会議で起きたデモを端緒とした反グローバリゼーション運動や女性運動・公民権運動・労働組合運動・障害者運動・LGBT（Q）運動などとの比較・検討を通して、多様な価値観を認め合い対話・民主的プロセスを大切にしながら社会正義の下で団結する新しい社会運動の特徴を見出しながら戦略・戦術・運動技法を学び､社会正義と社会連帯に基づいたソーシャルワークに反映させる議論を展開する。

ジェフ・シュミッドは、一般に流布するクリティカル・シンキングは、単に現体制への分析と適応・順応への思考であると批評する。適応・順応で終わることなく、体制の問題（抑圧など）を解決する変革行動へ導く思考が、クリティカル・シンキングとする。この思考こそが、ソーシャルワーカーに求められる批評眼とされる。

5. 考 察

日本では貧困・格差問題に対して、「活動家」や社会起業家と言われる人々が積極的に取り組んでいる。その特徴のひとつは､「自ら活動の場をつくる。ないものはつくればいい」である。これはまさにソーシャルアクションである。社会運動から学び、カナダの教育実践を参考にしながら､今の日本社会が求めるソーシャルワーカーを養成する必要があろう。